

生母には面会交流が必要である

【 母親は子供を愛している 】

日本では人工妊娠中絶は特殊な手段ではありません。産婦人科に行けば普通にどこでも受けられます。しっかり麻酔をかけて処置して終わります。妊娠したことは人に知られることもありません。

特別養子縁組制度は日本ではとても珍しい手段です。特殊な施設に行かなければ実施できません。普通の分娩です。痛いですし処置しても終わりません。学校はおろか職場や周囲の人にまで知られます。

一般の方々は誤解しているかもしれませんが 特別養子縁組は中絶の代用ではありません。確固たる意志を持って産もうと決めたから特別養子縁組になるのです。特別養子縁組にしたいと思ったからなるのです。そして産もうと思ったのは子供が好きだからです。子供を愛しているからです。子供が好きで愛しているから産んだのです。会いたくなかったから別れたくなかったから抱きしめたかったから産んだのです。

【 母親は産んで育てるつもりでいる 】

ところが子供を産んだとしても現実はそのような生易しいものではありません。ミルク代は誰が稼ぐの？ おむつ代は？ 食費はどうするの？ 働くとしたら誰が子供の世話をするの？ 働けるまでは誰が生活費払ってくれるの？ 子供が病気になったとき誰が面倒みるの？ 自分が病気になったとき誰がお世話をするの？ これらを解決しなければ子供は育てられません。母親は好きだけでは子育てすることができない現実と直面することになります。

赤ちゃんは泣くのが仕事です。褒めてもくれません。しかしうんちします。おしっこします。お腹がすいたら啼きます。ぐずります。抱っこしてとせがみます。気分屋です。かまってちゃんです。夜泣きします。お母さんが眠くても関係ありません。寒いと風邪をひきます。暑いとあせもができます。昼夜ぶっ通しでお世話が必要です。でもそれであたりまえです。お人形さんではありません。母親は産まれたら育てるつもりでいました。ところが生まれた後に待たないの育児に当たります。話には聞いていたけれども想像以上でした。終わりのない 24 時間営業の一人業務（ワンオペレーション）が始まります。交代要員はいません。

【 母親はぽきぽき心を折られる 】

これでは身が持ちません。まずは手伝ってと母親（祖母）を説得します。しかし中学生や高校生で子育てをすることに賛成してくれる母親ばかりではありません。反対するだけでなくここぞとばかりにお説教が始まります。話も聞いてくれません。しかも父親（祖父）まで参戦するとさらにヒートアップします。『 もういい 自分一人で育てる!! 』と啖呵を切ってしてしまいます。もう家には帰れません。でも心の中では泣いています。誰か助けて。

こんな時こそ相手の男の子を頼りたくもなります。しかし妊娠が分かったとたん姿をくرامす男の子もいます。それどころか蹴ったり殴ったりする男の子もいます。男の子もあてになりません。そしてぽきぽき心が折れ子供を委託することになります。

【 コラム ある生母の願い 国外の事例 】

養子となってしまった娘の誕生日には毎年手紙を書いていた。しかし投函することができずに自

宅の秘密の箱にずっとしまっていた。クリスマスの時期だけは（離れていても）きっとどこかの家でクリスマスをお祝いしてもらっているだろうと思い幸せに感じていた。

私は娘を委託した後から必死になって勉強した。大学を卒業して資格も取った。なぜなら娘に失望されたくなかったからである。娘を委託した時の惨めな私のままでいたくなかったから。

けれども私は娘のことを忘れることができなかった。娘に会いたい。その思いが頭から離れなかった。けれども娘には娘の生活がある。そこは理解している。私はその生活を壊すつもりは全くない。私は会いたいだけなのである。娘と暮らしたいとは思わない。娘は大きくなって今の生活になじんでいる。その生活を壊すつもりはない。かつて私が味わったような悲しみを娘の家庭にするつもりは全くない。ただ会いたい。ただ会いたいだけなのである。

私は娘を委託した行政の窓口に行き何度も娘に会わせてくれるようお願いした。子どもの状況を尋ねて何度も会わせてほしいと言った。しかし『規則だから会うことはできない』と言われた。とても悲しかった。とても傷ついた。

ある時 子どもが手術が必要な状況に陥っていることを風のうわさで耳にした。それでも行政の担当者は子どもが元気で学校に通っていると話していた。心配で居てもたってもいられなかった。けれども私にできることがあるわけでもなく なにもしてあげられない自分が悲しかった。

【 特別養子縁組は生母にとって必要な制度 】

女の子は自分で育てることのできない妊娠をしてしまうことがあります。中学生で妊娠してしまった。家出しているのに妊娠してしまった。 学生でまだ学費を払っている最中なのに妊娠してしまった。 妊娠した途端彼氏と連絡が取れなくなった。 DV で逃げまくっている。

この状況で無理に子供を育てなさいと 言われたら女の子は行き詰まってしまいます。どうしても育てることができないので子供をダンボールに入れて捨ててしまったり 駅に置いてしまったりします。これを防ぐために生まれた子供をそのまま産婦人科施設で預かり その後乳児院で保護しそして子供を幸せにしたいと望む夫婦に赤ちゃんを託するのが特別養子縁組制度です。

けれども 母親が子供を愛していることと養育できないことは別の問題です。養育できないから親権は終了しますが子供を愛することを終了する必要はありません。子供が大好きなことを止めさせる必要はありません。子供に会いたいということを阻止する必要はありません。あなたのことが大好き あなたのことを心から愛している そしてあなたの幸せを心の底から祈っているという手紙を封じる必要はありません。子供に暖かい靴下や帽子のプレゼントを贈ることを拒否する必要はありません。子供への気持ちを止めさせる必要はまったくないのです。

【 現在の日本の特別養子縁組では 養子縁組してしまうともう二度と子供と会えない 】

ところが現在の日本の特別養子縁組制度ではひとたび子供を委託してしまうともう二度と子供と会うことはできません。そもそも仕組みとして子供が母親と再会することを想定していません。そのためひとたび養子縁組してしまうともう二度と母親は子供と会うことはできません。

そもそも再会することを想定しているのであれば いつどこで再会しましょう。あるいは何歳になったら再会しましょう。それまでの面会は子供が混乱しないように面会を控えて交流だけにして子供が会いたいと言い出したら面会するようにしましょうという約束を取り付けるはずです。ところがそんな約束はありません。

また交流についても約束するはずです。母親からのプレゼントは OK なのか 手紙は OK なのか あらかじめ打ち合わせをするはずです。交流は直接するのか支援者を仲介してするのか あるいは直接交流だとしんどいので支援者さんに仲介に入ってもらいましょうとか約束をするはずです。もし連絡が取れなくなっても支援者にだけは連絡先を伝えておくこと。あるいは交流ができなくなった場合あるいは交流をお休みしたい場合の連絡方法について あらかじめ約束をしておく必要があります。交流するつもりであればこのような約束が必ずあるはずです。今の日本ではこのような約束はありません。仕組みとして母親と子供は二度と会えない仕組みになっています。

【 コラム ある母親の娘探し 米国の事例 】

私が手放してしまった娘が〇〇歳になった。もう大学生になる頃である。娘の住んでいるところは調べていたが 娘の家庭を壊したくなかったので娘が受け止められる年齢になるまで待つことにしていた。生母の支援団体に 『 娘にどうやって連絡を取ったらいいだろうか 』と相談した。するとまずは手紙を書くことを推奨された。なぜなら手紙であれば 双方が自分の意志で面談を受け入れるかどうか決める事が出来るし考えるための十分な時間的と心の準備ができるからだと教えてくれた。生父にも相談してみたが生父には反対された。けれども手紙を書いて養父母宛てに郵送した。しかし返事は来なかった。

ある日意を決して養母に電話で連絡をした。『 とても重要な話があり あなたと話したい 』と話した。この時点では自分が生母だとは名乗らなかった。10 分後に養父から電話があり話というのは娘の事かと言われた。その瞬間声が震えた。養父から 『 あなたはひょっとして娘の母親なのですか 』と聞かれ yes と言葉が出そうになったが 言葉を飲み込んで 『 娘の母親はあなたの奥さんです 』 と泣きながら答えた。すると養父もすぐに理解し養母に電話を代わりますと言って養母を電話口に呼び出してくれた。そして養母の方から 『 ぜひ明日私たちの家に来てください。娘は大学に進学して今日はここにいませんが ぜひ私達の家に来て娘の部屋を覗いてください 』 と言われた。

翌日 娘にあげる誕生日プレゼントを持参し養父母の自宅を訪問した。養親は喜んで迎え入れてくれた。養親は 『 私達は娘から（私達が与える以上の）はるかに多い喜びと幸せを与えてもらった。本当によくできた素晴らしい娘です 』 と言ってくれた。『 私たちは（すぐには養親となれず）里親として委託されたためいつ私たちの家族から引き離されるのではないかと気が気ではなく何度も娘を失うのではないかと 』 と思っていたと語っていた。しばらくお互いの身の上話をしたのちクリスマスにまた招待することを約束し帰路についた

娘と再会したのはクリスマス休暇の時だった。あらかじめ生母が訪ねてくることは伝えてありどきどきしながら訪問した。娘は立派に成長していた。不思議なことに私ではなく養父母に雰囲気といい話し方といい似ていた。少し寂しい気がしたがもう私の娘ではないんだなと感じた。娘は私が訪ねてくることにより養親から離縁されてしまうのではないかと心配していたようだった。『 そんなことはない。こんな素敵な両親（養親）からなぜあなたが引き離されなければならないの？ ここはあなたのおうちよ 』 と返事した。私は笑顔で振るまうようにしていたが同時に寂しかった。

娘が〇〇歳になり 4 月のイースター祭りのとき 両家で食事会をすることになった。養親の家に生母と生父とその家族が集まり両家でお祝いをした。たくさんの写真を撮った。生父とその妻の写真も撮影され娘の家に飾られている。

【 母親はもう二度と子供と会えないということを本能的に察知している 】

母親は子供を養育委託する時に もう二度と子供に会えないということを本能的に理解しています。そのため子供を委託するということに対して非常に強い抵抗と恐怖を感じます。母親は自分に養育能力がないことは理解しています。そして自分が養育することによりかわいい子供に自分がつく当たってしまうかもしれないと理解しています。けれどもそれ以上にもう二度と子供と会えなくなるということの方が母親を苦しめるのです。その選択を自分がしてしまった。自分のせいで子供と二度と会えなくなる。これが後々母親を苦しめます。あの時自分が踏ん張れなかったらから子供を手放すことになってしまった。子供に申し訳ない。そんな自分が情けない。こんな自分じゃなかったら子供を幸せにできたのに。自分が悪い。自分が全部悪い。これが母親を苛みます。養育のためとはいえ二度と会えなくさせる必要が本当にあるのでしょうか。

【 コラム ある生母の離別 国外の事例について 】

私は〇〇〇〇年にカトリック系の施設で出産した。私は自分の手で赤ちゃんを育てたかった。自分の親も当初は自分の意思を尊重してくれていた。ところが彼の親が強く反対したため自分の親もそれに折れて赤ちゃんは強制的に養子に出されることになった。その時代は未婚の女性が赤ちゃんを育てることなんてとてもできない時代だった。大きな戦争もあって社会にもそんな余裕はなかった。赤ちゃんは私が見ている前で強制的に取り上げられてしまった。私はそれに逆らえなかった。私はみすみす赤ちゃんが連れていかれるのを指をくわえて見ていることしかできなかった。

自分の赤ちゃんがいなくなってしまうのはどんな人であっても苦しいことです。私は赤ちゃんがいなくなった後に鬱病になった。けれどもその時代にはカウンセリングという概念もなかった。私は自分で自分のことをコントロールできなくなってしまった。赤ちゃんはいなくなってしまった。あの子の誕生日は〇〇月〇〇日。毎年この日になると憂鬱になる。

【 現在の特別養子縁組制度は 子供の遺棄を防ぐことだけで終わってしまっている 】

現在の特別養子縁組制度は子供が遺棄されないことを主眼に置いた制度です。母親の子供に会いたいという気持ちについては考慮されていません。母親は自らの手で子供を遺棄しないで済みますがそこがゴールです。母親の子供に会いたいという気持ちには対処されていません。会いたいという気持ちに対処しないので喪失についても対処できません。喪失したままで終わっています。

子供と会えることで母親は喪失を軽減できます。子供と面会して元気な姿を見ることで自分の選択を肯定できます。子供に大好きだよ 愛しているよ 会えなくてごめんね と手紙を送ることで自分の気持ちを吐き出すことができます。子供の写真や おかあさんへの手紙を読んで めそめそしている自分を奮い立たせます。そしてもうこんなに悲しい思いは絶対にしない。絶対に立派な母親になってやるという気概が生まれます。

現在の制度は養育の責任から解放させることがゴールになっています。子供の成長を陰ながらも見守るという母親のささやかな幸せすら奪っています。特別養子縁組制度は子供の遺棄を防ぐためには必要な制度です。しかし現状では母親の救済になっていません。

【 母親の喪失を癒すにはささやかながらでも子供との交流が必要 】

母親は子供が嫌いでも手放すわけではありません。子供のことが大好きです。子供のことが可愛くて仕方がありません。子供のことが大事です。自分に子育てられるだけの能力があればどんな状

況であっても独力で何とかして育てます。けれどもどうやっても育てることのできない状況になっているわけです。自分に養育能力がないために大好きな子供を苦しめたり幸せにすることができなかつたりするのです。母親はそんな自分を恥じて そんな不甲斐ない自分を責めて自分で育てることを断念し養育を委託するわけです。自らが自らの意思で子供が幸せになることを願って委託するのです。ささやかながらでも子供との交流は絶対に必要です。それでないで母親が報われません。

【 養育委託するときの悲嘆 】

母親は子供を養育委託することに決めてしまうと いまだかつて経験したことのないようなとてつもない深い悲しみと悲嘆に苛まれるようになります。

私は自分の手で 赤ちゃんを手放してしまった。こんなにかわいいのに 自分の手で赤ちゃんを手放すことに決めてしまった。私はひどい母親だ。こんなにかわいいのに。赤ちゃんごめんなさい。赤ちゃんごめんなさい。こんなお母さんでごめんなさい。ごめんなさい。本当にごめんなさい……。

母親は養育委託することに決めてしまうと そこから子供を失う悲嘆との戦いが始まります。『 目を覚ましたらいつも横にいたあの赤ちゃんがいない いつも聞こえていた泣き声が聞こえない 抱っこしていたはずのあの赤ちゃんがいない 』 『 私は何ということをしてしまったのだろう 私は自分自身の手で 自分の赤ちゃんを失ってしまった 』 『 本当に私のした決断は正しかったのだろうか 』 そしてその決定をした自分を責める心の刃との戦いが始まります。そしてこれは長い年月の中で繰り返しやってきます。

母親はこの苦しみを背負うのです。母親が子供に会うのを遮らなければいけませんか？ 子供の写真を送ることがいけませんか？ 子供が書いた似顔絵を送ることがいけませんか？ 子供と会うことは犯罪ですか？ どうして子供と会ってはいけないのですか？

【 コラム ある生母の悲嘆 国外の事例 】

その時代は子供を育てられない母親がどのようにして養子縁組するのか どのような選択肢があるのかあまりにも情報が不足していた。そもそも出産後のメンタルケアという概念もなかった。だから私は子供を養子に出した後私の心はざくざくに傷ついたままだった。だからこそ子どもを養子に出してから自分がしっかりしなくてははいけないと気を張った。けれどもふとしたときに子どもの事が思い出されとても切なく辛く悲しかった。けれども誰も助けてはくれなかった。だからひたすらにがむしゃらに生きた。そうでないとこんなにつらい思いをしてまで息子を養子に出したことに意味がなくなる。なにより息子に申し訳ないと思ったからだ。けれども一番傷ついたのは 自分は精一杯息子の幸せを考えて泣きながら選択したのに そして息子を精一杯愛しているからこそ（私は苦しいけど）誇るべき恥じることのない選択をしたのに 周囲からは 恥ずべきこと 情けないことをしたと言われたことだ。そう非難されるたびに私はとてもいたたまれなくなった。しかも私の周囲には支援してくれる人もおらず相談する相手もいなかった。この時期は本当に辛かった。

【 コラム ある生母の苦しみ 米国の事例について 】

現在こそ落ち着いているものの 私は養子縁組に息子を送り出してから〇〇年間 自分は良くない事をした 後ろめたい事 恥ずべき事をした こうなったのは自分のせい 自分が悪い自分なんて消えればいいとずっと考えていた。そして 誰にも打ち明けられず 親からも恥と言わ

れ 暗澹たる気持ちで鬱々と過ごしていた。この時期は毎月生母を対象とした当事者サークル（自助団体）に通って悩みを打ち明けて復帰のための支援を受けていた。サークルを先導（ファシリテーター）してくれる支援者はよき理解者でもありセラピストでもあった。生母のための（当事者だけの）自立支援会で お互いの体験や心境を聞いて 自分だけじゃなかった 自分は苦しかったんだと相手の悩みによって自分が気づかされたり 相手の答えが自分の答えだったという体験があった。その後時間はかかったが やっと抜け出せて自分を責めないようになり やっと自由になれた。

私が大切だと考えているのは養子に送り出した後の生母の支援である。生母は周囲からの心無い言葉にととても傷ついて もう誰にも言うまい 恥だ この事にはもう絶対に触れまいと考えるようになる。そんな生母がととても多い。そんな彼女達のサポートはとても大事であるにも関わらず周囲の反応はありえないほど冷淡で残酷で悲惨だった。自分が精一杯考えぬいた結論であり子供の幸せを考えた結論であり誇りとする行動だと思っていたが 周囲から あなたが悪かったとか家の恥だとか言われると 段々と自分を責めるようになってしまう。家族やサポートする支援者は言葉を選び 自らを恥としないよう 選択した決定に敬意を払い尊厳を守るべきである。これをやらないと自尊心が回復できなくなる。

【 グリーフケアの重要性 】

何回も養子縁組を繰り返す女性には自分を大切にできないという問題があります。養子縁組すると赤ちゃんがいなくなるだけです。悲しみが消えてなくなるわけではありません。養子縁組しても悲しみが解決するわけではありません。子供を救えなかった。子供を育てられなかった。十分にグリーフケアがなされないと精神的な不安定さから依存が形成され 変な男性に捕まり何度も妊娠させられ中絶を繰り返してしまいます。こうなるとさらに傷つきなかなか立ち直れなくなり何度も中絶と養子縁組を繰り返すようになります。この連鎖は生母にも養子にも一番辛い。何とかしてこの連鎖を止めなければならないのです。

【 コラム 生母の安全基地 米国での取り組み 】

支援者は生母の変化を感じながら生母と伴走するようにしている。そして周囲から心無いことを言われても ただひたすらに受け取って逃げ込める安全基地を用意している。周囲の人は普通に会話しているだけであり別に生母を傷つけようとは考えていない。しかしちょっとした言葉がかなり傷つく。『 フーン子供育てていなんだ。出しちゃったのね 』ひたすらに受け取ってくれる場が絶対に必要である。否定しないでただ受け取ってくれる場所はこの上ない安全基地である。再起するための礎となる。

【 コラム 生母の社会復帰支援 米国での取り組み 】

また生母から要望がなくても 生母支援のためのイベントについても折に触れて紹介するようにしている。もし生母が周囲の人間関係や地域社会（学校や職場）になじめず苦しい状況に陥ったとしても 生母が逃げ込める（生母・養親・養子・ソーシャルワーカーを中心とした）コミュニティをあらかじめ作って受け入れられるように用意している。危機的状态に陥ってから対策を練るのではなく あらかじめ悩みや苦しみを打ち明けられる環境を用意しておき 日頃から信頼関係を作り 生母が安心して話せるよう快く入ってこられる場を用意しておくことも重要である。この用意がないと再発防止はおろかトラウマの解消や社会復帰すら難しい。

【 コラム お誕生日のお祝いについて 】

母親にはおひとりさまでもいいので子どもの誕生日にはお祝いをしようよと提案しています。私はこの1年間よく頑張ったというささやかなお祝い会です。母親が子どもに会えるかどうかは別として子供のお誕生日会をするということは 少なくとも1年間自分は頑張ってきたんだということです。自分は頑張ったんだということを気づいてもらうことが目的です。

ほとんどの母親が自分で自分を責めています。自分を責める必要は全くないのです。子供を傷つけることなく委託できたのです。自分が育てたいという想いを抑えて 自分では子供を不幸にしよう だから子供を自分が虐げることなく育つように 強制されるのではなく自分の意思で一番幸せになる方法を考えて決定したのです。自分の決定とその過程を誇ることがあっても 貶る必要は全くありません。ところがほとんどの母親が自分を責めてしまいます。責めるつもりがなくても子供が離れてゆくシーンが浮かびあがってきます。抱っこしていた時の表情や寝息ミルクの匂い子供の肌子供の匂い服の肌触りが浮かび上がります。切なくなります。悲しくなります。そしてため息とともに『 あんなことさえしなければよかった・・・ 』と独りごちます。自覚していませんがこれは自分を責めているのです。意識せずに責めているのです。ほとんどの母親が自覚すらしていません。

もちろん中には 『 子どもと会えないのに 子どもがいらないのに どうしてひとりで誕生日会なんてやるの 』 『 わざわざあの苦しかった記憶を どうしてまた思い出さないといけないの 』と言われる母親もいます。その言葉が出てくる母親は苦しんでいる母親です。この母親を見つけることも目的の一つです。

【 コラム 生母のための自助団体の必要性 米国のある生母の証言 】

私にとって助けになったのは 自分自身の体験を話すことがトラウマの解決につながったことである。打ち明けられず 悩み 抱え込んでいるだけの時は本当に辛かった。自分の体験をただひたすら聞いてくれて 否定されず 肯定的に受け取ってくれるだけで 本当に心の荷が降ろせた。心が軽くなった。あの体験は自分が経験しないと理解できない。だからこそ生母が自分の話を存分に打ち明けられるような環境を整えるべきであると考えている。また家族も生母の選択を肯定的に受け止めるようにするとどん底から立ち上がるができるようになる

【 生母の背景 】

生母は独特な背景を抱え込んでいる。独特な背景とはコミュニケーション能力の欠如や社会性の欠如や生活能力の欠落や家族関係の破綻や貧困問題である。これらの背景があるため生母は家族や地域社会から孤立していることが多い。分娩が終わり支援団体の元を離れ家族や地域社会に戻っても 生母が再び孤立しないよう良好な関係が築けるように支援していくのも生母支援団体の大切な使命である。だからこそあえて自宅訪問をしている。周囲から孤立していないか 就学や就労に向けて動いているか 失業を繰り返していないか確認する。生母の『 助けて！！ 』を掴むためには常に連絡手段を維持しておくことが必要である。もっと言うならば連絡をいつでも受け取れる状況にしておくだけでなく 何も問題がなくても支援団体から定期的に連絡を行い状況を把握しておくことも必要である。

【 コラム 自助団体について 米国の取り組み 】

親睦を深めるため景色の良いところでキャンプをすることがある。みんなでワイワイしながら食事を用意したりテントを用意したりする。食事が終わり火を囲みながら身の上話をすることもある。時には養親や養子も入ってくる事もありお互いの考えが聞けるよい機会となる。このように立場の異なるもの同士が顔を合わせる機会も作っている。しかしケースによっては個別対応にとどめる場合もある。

日本には公の場で自分が生母である事をカミングアウトしたり 生母が自分自身の体験を語れる場は存在しない。勇気をもって自分の体験を語ってくれた数少ない生母がいても 心無い非難や中傷に晒されズタズタにされている。これは 1970 年代のアメリカと同じで 日本の社会には明確な偏見があり養子に送り出した生母は 子どもを捨てる悪い親 ふしだらな女 とみなされ悪者として扱われる。そのため生母のつらい思いや体験を持ち出せる場が存在しない。生父については支援の対象ですらない。

【 コラム 生父支援について 】

アメリカでも少ない事例ではあるが生母のサークルに男性（生父）が参加することがある。父親（生父）が認知や養育を放棄せずに生母に代わって養育するというのは珍しいことである。妊娠したとたん連絡がとれなくなる男性（生父）が溢れている中で責任感の強い男性もいる。しかし生父による養育はまだまだ少数派であり手探りでやっている。